新多良間空港整備事業

受賞機関　沖縄県宮古支庁土木建築課

はじめに

旧多良間空港は、昭和46年に緊急着陸用飛行場として建設され、その後、昭和47年の本土復帰に伴い滑走路延長800mに拡張整備され、以来19人乗りのDHC－６型機が宮古及び石垣路線を往復し、住民生活に密着した交通手段になっていた。

しかし、機材が小型だったため、気象条件の影響を受けやすく少々の悪天候でも欠航し、住民生活に不便を強いるとともに産業の振興にも大きな影響を与えていた。

このようなことから、機材の大型化による輸送力の拡大と安定運航及び快適性の確保を図るため、平成11年度から滑走路延長1,500mを有する新多良間空港が整備され、平成15年10月10日に開港した。

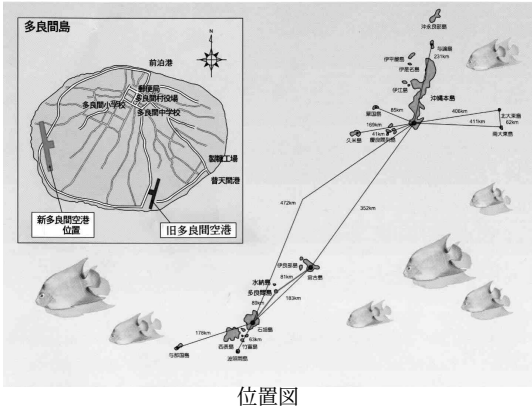
新多良間空港

事業の概要

○空港総面積：約35ha
○着　陸　帯：1,620m×150m
○滑　走　路：1,500m×45m
○事 業 期 間：平成11年度～平成14年度
○総 事 業 費：約43億円

事業の特徴

新多良間空港建設地の森林には琉球松が群生しており、防潮林としての機能の他に、国際保護鳥に指定されているサシバの中継地として休息するための樹木としても重要であることから、伐採による影響を極力減らす必要があった。そのため、空港建設地に群生していた琉球松を付替道路沿いや空港ターミナル付近に移植を行い、制限表面区域の伐採箇所には、航空機の飛行に支障がないように樹高の低い樹種を積極的に植栽し、早期に緑が復元するように配慮した。その結果、平成16年度のサシバの飛来数は1,200羽で、平成15年度より増加し、その大半のサシバが空港周辺に飛来したことから、一定の成果が得られたものと考える。



位置図

また、新空港建設地の近くにはエメラルドグリーンの美しい海と白い砂浜が広がっており、広大な空港建設現場から発生する濁水の流出を抑えなければならなかった。そこで、空港建設により伐採した樹木をチップ処理し、このチップ材が現地試験により赤土濾過材としての効果を確認できたことから、空港建設地周辺に敷き詰めた。これにより、海岸への濁水流出に効果を発揮し、美しい海岸を保全することができた。

事業の効果

新多良間空港の開港に伴い、航空機材も39人乗りのDHC－８型機が就航したことから、天候に左右されにくく、就航率が96.7%となり開港前の86.9%から大きく向上した。そのおかげで計画的な旅行もできるようになり、旅客数も開港後の１年間で約37,000人となり開港前の約28,600人から大幅に増加した。

また、新多良間空港開港前には悪天候が続くと生活物資が不足する事態に陥ったが、機材の大型化によって貨物の輸送能力も６倍に増大し、生活物資を安定して供給することが可能になり、安心して島の生活ができることから、定住人口の増大に繋がることが期待できる。観光客も今後さらに増えることが予想され、地元農水産物の島外出荷の可能性も拡大し、さまざまな地域産業の振興が期待される。

賛助会員　パシフィックコンサルタンツ㈱